

すなお

令和3年4月号

中和大教会創立130周年記念祭 執行
令和3年10月10日(日)



明治三十九年十月四日

おやのことば
いんねんという、いんねん一つの理は、たんのうより外に受け取る理はない。よう聞き分け。しつかり一つたんのうの理を洛めてくれ、洛めてくれ。



なかなか出口が見えない閉塞感が続く日々ですが、皆様いかがおつとめですか？
私も三日に大阪市内に行く用事があり、教会に帰ってから未だに自粛生活が続いています。たびたびこの状態を繰り返していますので、ずいぶん慣れてきた感がありますが、信者さん皆さんとの距離感を保つことが心の距離感にもなってしまうようで、こちらがしんどい感じがします。電話でも話は出来ますが、やはり違いますね。
そんな中、皆さんに何を伝えられるかと、ずいぶん古い本ですが東中央大教会の初代会長柏木庫治先生の本を久しぶりに読みました。そういえば親会長さんもよく柏木先生の話をされていたことを思い出しました。
信仰をし始めて、まだ一年という頃に詰所普請のために昭和十八年頃、千円の御供をする。という話がありました。当時の千円が現在のどれくらいになるか分かりませんが(ビフテキ一人三十銭、百銭が一円)という時代です。
(次ページへ)

会長

すなお (立教184年4月号)

通 巻 No.729
発行所 天理教瀬戸路分教会
794-0007 今治市近見町4-5-10
☎ 0898-23-5004
FAX 0898-23-5123
発行日 2021.4.16
責任者 二宮英治



ひのきしんと勇み心

田中道則

コロナ禍でにをいがけがしにくいので、半年くらい前から週1回、海岸のゴミ拾いに行くようになりました。そこは堤防とテトラポッドの間に大量のゴミがあり、ペットボトルだけでも数千本あります。

海に出たゴミが潮の流れによって集められた結果、とんでもない量になっています。ゴミ袋(大)が数分でプラスチックゴミで満タンになります。この規模になると私一人がコツコツやるのは自己満足で、行政に動いてもらう方が手っ取り早いのかもしれません。

しかし、少しずつですがゴミが減っていく堤防を見ると嬉しく勇み心が湧いてきます。なんてひのきしんは気持ち良いんだと思います。今だからこそ出来ることを楽しんでやっていきたいです。

教会ニュース

訃報

今月3日、葛城市在住のようぼく市川治さん(享年74歳)が出直されました。身近な家族に見送られ、コロナ禍の影響のため、葛城の会長さんをお願いして4日の遷霊祭、5日の告別式の斎主をつとめていただきました。

全教一斉ひのきしんデー

今年の全教一斉ひのきしんの活動は、密集を避けるために今治支部では各教会でひのきしんをすることとなりました。それで教会では29日(祝)午前9時30分より教会内の除草、剪定、そして、教会周辺のごみ拾いをさせていただきます。軍手、道具等を準備し当日まで体調管理をして元気に参加して下さい。参加予定の方は会長、奥さんへ26日までに連絡をお願いします。

編集後記

新しい年度がはじまりました。それぞれ新しい生活が始まり、緊張や希望で胸いっぱいのことと思います。未だコロナは終息が見えず、先の見えない不安な部分もありますが、神様にもたれてこの節を乗り越えましょう。(編集者K)

後々大教会長にも本部員にもなる柏木先生ですが、当時は駆け出しの頃とて理の親の言わんとすることは分かって心の中で争いがあり、「そんな金は出せない」と突っぱねたそうです。でも、最終的にややくそくなって「出しますわー!」と言ってしまい、御供をされたそうです。

あとあと、分かってから納得してからしても時期を逸しては意味がない。だから親はその時、意味が分からなくとも、ともかく尽くすこと御供することを誠心誠意伝えてくれ、私は助かったのだと。

この時の心の状態を包み隠さず、本音で書いていて改めて感じ入りました。表現じゃないんですね。本音が人の心を打つんですね。本を出版されるのはずっと後のことです。が、ともかく一つ一つの悟りが明るいので、なおさら心が勇みます。

今、この時代だからこそ勇めないのか、戦中、戦後はどうだったのか、阪神淡路大震災、東日本大震災の時はどうだったのかと考えるとそれは時代とか状況とかではなく、自分がどう勇みや喜びを見つけ味わって生きるかということが一番だと思います。

日々、いろんな事が起こってきます。でも、それを乗り越える力を神様は下さっています。さあ、勇んで勇んでかき今出来る、そして今しか出来ないことをしっかりとやりさせて頂いてください。



新たな生活へ向けて

椿 信代

一番下の妹の真帆がこの4月から専門学校へ通うため、先日大阪へ引っ越してきました。これから始まる生活を想像すると、期待と不安でいっぱいだと思います。かつて自分が大学に入った頃も、初めての土地で知り合いもおらず恐る恐る通っていたことを思い出します。だからこそ、今は近い距離から妹を助けてあげられるのは良かったなと思います。

このご時勢、仕事や生活が苦しい人が本当に多く、毎日のようにつらいニュースが駆け巡っています。その中でこうして新しい生活を始められることや、それを応援できる余裕があることは本当に恵まれていることだと感じます。この幸せに気づけないと、ついつい些細なことで不足を言ったり、もっと良いものをと求めるばかりで満たされない状態に陥ってしまいます。妹の新生活をきっかけにまだまだ至らない自分の心づかいを見つめ直しました。日々元気で過ごしていることに、明日からも「ありがたい」の心で通りたいと思います。